九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 言語文化空間における「連続」と「無限」 : 横川雄二氏の研究の余白に

阿尾, 安泰
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/5615

出版情報：言語文化論究. 22, pp.21-30, 2006-03-16. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

# 言語文化空間における「連続」と「無限」－横川雄二氏の研究の余白に

阿　尾　安　泰

急逝した横川雄二氏の論考について語ってみたい。ただその前に同氏の人となりについては、すでに小谷教授の的確な紹介が存在している[1]とともに、同氏の専門であるロマン派について述べる力は筆者にはまったくないということを明らかにしておかねばならない。残されている可能性としては、生前同氏と議論した近代における言語文化空間の問題しかないと思われる。横川氏はロマン派研究を大きなコンテクストの中で行おうと考えていた。

それは、ロマン派の脱構築ともいえる作業であった。ロマン派を19世紀前半の限定された運動と捉えるのではなく、近代から現代に向かう大きな流れの中で、その流れとともに生まれ、時代がたどる軌跡の独自性を示す重要なファクターとして考察しようとしていた。ロマン派的な動きは幅広い分野に浸透するとともに、また微妙に形を変えながら、後の時代へと進んでいくのであった。そうした点からすれば、ロマン派の問題は、19世紀にとどまらず、現代的な問題でもあった。横川氏の論考の中に、ラカン、クリスティヴァといった名が出てくることは決して偶然ではない。

時間的な広がりと同時に、ロマン派的な問題というのは、文学はもとより、表象という次元を経て、絵画、彫刻をはじめとする芸術、そして音楽の諸問題をまきこみながら、哲学、経済学、政治学の領域までをその対象とするものであった。またそうした認識の基盤を問う中で、数学、物理学、化学をはじめとする自然科学の分野にまで射程をのばしていくものでもあった。諸領域間の交流を通しての言語文化空間の新たな生成という主題を避けることはできなかった。

## 1．近代言語文化空間成立までの歩み

近代の歩みは神学的な世界からの解放からはじまるとされる。神を中心とする超越的な見取り図が、ルネッサンス期を経て、次第に世俗的な認識体系へと移行していく。計量的な見方が発展していく中で、連続量の測定により、世界を捉えていこうとするのである。それはデカルトの手を経て、ニュートンへと引き継がれていく世界観でもある。

> （・・・）空間は、中世の空間がもっていた上下の階層的《意味》＝ヒエラルキーを失い、《方向》のない無限に連続する均質なものとなったのである。もはや天使の高みもなければ、地上的な低次世界もなくなった。宇宙から救済や失墜の方向が消え、ニュートン的空間が登場するのである[2]。

この水平化、均質化のプロセスが近代を推し進めていくと言える。空間の連続性にたいする信頼が、近代の歩みを支えていくのである。同時にここにおいて、無限という問題も認識の射程に上ってくる。

この認識の構造が科学の進歩を支えていくのも、それが時間、空間の安定性を新たな形で保障するからである。数量的なモデルを設定することで、世界をより明確な形で記述していくことが可能となる。知識量の増大化はモデルの明晰化と対をなして、知覚認識の幅を広げていくのである。すべての事象を数量的な基準により整序し、並べることができると考えるとき、科学的な遠近法が成立する。いいかえれば、そうした認識をささえるロゴスなるものを信頼することである[3]。遠近法は見るものと見られるものとの分離を前提とし、この両者は決して混同されてはならない。主体と客体はその独自性において、分離され向かい合うものとなる。こうした見取り図を哲学の世界で完成しようとするのが、カントであろう[4]。横川氏がロマン主義の分析を通じて問題にしていこうとするのは、こうした思考の枠組みである。

## 2. ロマン主義からの問い返し－遠近法と空間の変容

目に見えるものは語ることができる。近代のエピステーメーの前提はそこにある。視覚によって距離を測れるものは、空間の中にしかるべき位置を占めるはずだからである。こうした視覚にもとづく距離空間こそ、近代の認識の出発点であり、科学的遠近法の原点となる。それなくしては、時空的にも安定した均質的なシステムは構成できない。こうした配置にたいして、横川氏はワーズワースの詩作品の分析を通じて、新たな見取り図を示そうとする。その時距離空間の風景ではなく、《記憶の風景》が出現する。「距離を介在させ描く主体と描かれる客体が分離する遠近法、科学的遠近法によるではなく、ワーズワースの《記憶の風景》は、主体と客体が密接に関連しあった、いわば「心情の遠近法」とでもよべるものによっていたのである」[5]。ワーズワースが詩作品において述べようとする特権的な瞬間は、いわば主体と客体、内面と外面といった対立項を隔てる距離を無化するものであった。

> （・・・）静まりかえった湖面に映る空を見つめながら、その時そこに“unknown modes of being”を、それが如何なるものかは明示できないが、感じ取ったということを示しているのである。湖面の“steady”とは対照的なこの“uncertain”は、遠近法的知覚が崩れ、外界の内側に取り込まれ、外界を自己の内側に取り込んだ少年の存在様態を逆照射していたのである[6]。

距離の無化が重要なものとされるのも、そこから交流が生まれるからである。その可能性に文学なるものが賭けられている。明確な輪郭を失うかわりに、ダイナミックな融合が出現するわけである。そこには一義的な限定性を逃れる豊かな動きがある。均質な空間は安定と引き換えに、システムに属する諸要素の意味機能を限定することを課してきた。そうした縛りを解くことが今求められているのである。こうした空間批判の契機をロマン主義は図らずも持つことになる。多様性にむけての運動である[7]。

豊かさを求める軌跡は、視点のダイナミズムを呼び起こす。語りは1方向的に伝達されるのではない。単線的な叙述ではなく、複数の視点が交錯しあう、ポリフォニックな語りが求められていく。主体と客体の対立が中性化される中で、主体みずからも複数化する。現在の自我は過去の

自我との相互干渉を通じて、自らの位相を決定しようとつとめていくであろう。自己は存在するのではなく、生成されていくものなのである。

ここにおいて、言語文化空間における生成の問題が明らかな形を取って現れてくる。主体と客体の距離の廃棄において実現される交流は決して無力な場ではない。その融合がもたらす濃密な空間は均質的な環境のあり方を批判する契機ともなる。この新たな場の出現の重要さはいくら強調してもしすぎることはないであろう。記憶により呼び起こされる風景、そしてそこから感じ取れる経験というのは、単なる過去の再現ではない。新たな瞬間の創出である。目にするのは、単なる事物ではない。

> (・・・) 少年はまわりの世界を距離をおいて「もの」として見ているのではなく、何か生命あるものと体感覚的に交わっているのであって、この一節には主客が文節されない「こと」的世界が、世界との生きた接触が、たしかに現前している[8]。

ここにおいて、連続的な時空上に特殊な点が出現したことが述べられる。それが「時の点」(“spots of time”) であった。記憶は単なる反復であることをやめ、生成の契機となる。単調な連続ではなく、特異点がしかるべき条件のもとに生成されていくのである。もはや方向は過去に向かうのではない。未知なる未来へと向かっていく。

> (・・・) 回想とは、記憶の風景に甦るかつての体験に意義を見出しそれを核として自己の物語を形成することであったが、それはとりもなおさず、こうして過去というレーテーからそこに隠されていた自己の姿 (形) が現れること、ア/レーテイアにほかならないのだから。(・・・) 記憶の風景をとおし、こうして〈不在〉の自己が〈現前〉するこころという深さある鏡。そこで過去は繰り返し発見され、未来に向けて現在の自己が形作られてゆく[9]。

こうしてロマン派的な問題意識は言語文化空間における新たな場の創出という大きなテーマを提示することになる。近代以降成立していく資本主義社会は、均質的な時空体系を加速度的に打ち立てていった。その進行を改めて意識化させる契機こそ、時空体系の連続的な進展を無化するかのように出現する「時の点」とも言えるべき特権的瞬間であった。時空の流れが断たれようとするときこそ、これまで自然に進行していたかに見えるプロセスが意識化されるとともに、それを分断する瞬間の力の大きさを知ることになる。こうした異化効果をロマン派も果たすことになる。

強調しておかねばならないのは、こうした批判的な方向を進歩的な趨勢にたいする反動とのみ捉えるのは、問題を過小化するということである。むしろ、この特権的瞬間と連続的な時空の流れは相補的に存在し、近代の言語文化空間の特質を構成していると言える。横川氏の功績は、ロマン主義の運動を大きなコンテクストの中で規定したことにある。ロマン主義とは決して近代の直線的に見える進歩に対する傍流の動き、時代錯誤の営みなどではなく、むしろ近代以降進行していく大きなプロセスの中から生まれ、その過程を批判的に位置づけようとする試みである。その果たした機能は、以後もさまざまな形で受け継がれながら、近代批判の活動が展開していくであろう。そうした運動の軌跡を簡単に以下の章で確認してみたい。

## 3. 批判の系譜

### 3-1.「文学」なるものと起源をめぐる探究

フランスにおいては、近代の均質的な空間の進行に対する批判として「文学」なるものが現れたように思われる。文学は現実との関係の中で、形成され、現実の描写を通じて自己の世界を形成するわけであるが、その過程の中で、現実的原則に還元されないものを生み出していく。たとえば、レアリズムの旗手とされるフロベールは、作品制作の過程の中で、無意味とも思える描写が続く『ブヴァールとペキュシェ』という奇怪なものを生み出してしまうし、また詩の世界においては、言語のコミュニケーション性を無化するような作品を生み出すマラルメのような詩人が現れてくる。このように現実的な有効性に回収されない文学作品の特殊性は、ブランショが『文学空間』の中で、詳細に分析していく。連続的に進んでいくかにみえる運動の中において、特異点のように出現する作品の目指すところは、起源をめぐる問いかけとなってくる[10]。言語がこのようにいわばその使用価値を超えた次元で機能し始める事態をフーコーは以下のように述べていた。

> (・・・) ここに、言語をその生のままの存在において顕示する役割をもった、言説的でない言説が生まれるであろう。言語のこの固有の存在こそ、やがて十九世紀が〈言葉〉(言語を表象の存在にたえずそっとピンで留めるという機能をもっていた古典主義時代の「動詞」にたいして) と呼ぶことになるものである。そして、言語のこの存在を保持し、それをそれ自体のために解き放つ言説こそ、文学にほかならない[11]。

文学がおのれの生成過程を問い返そうとし、自らの固有性について思いをめぐらすときに、あらたな状況が生じるのである。自らが行う言説生産過程がいかなるメカニズムのもとに機能していくのか、またそれを意識化するには、いかなる行為が必要なのかが問われていく。

### 3-2. 名付けることの拒否－ゼロ記号をめぐって

文学が提起するこの自己言及的な問いは、哲学的な領域をはじめとして、他の分野にも影響を及ぼす。起源をめぐる探求は、生成の現場の考察へと導くことになる。ここで注意すべきことは、こうした探求においては、起源なるものを実体化しないということである。はじめの状態を固定的にとらえないのである。というのは、基本的にこの始源なるものは、決してそれ自体で存在するのではなく、後から遡及的に想定される対象でしかないからである。現在の姿を過去に投影して、そこに現実の再現しかみいださないのであれば、この問いかけは単なる自己反復にすぎず、現状の位置づけすら過つ危険がある。反復ではなく、自己を生み出す生成のプロセスを問おうとするなら、はじめから答えを与えるような作業は避けねばならない。名付けることの拒否とは、中心を実体化しないこと、核心部なるものに固定的な性質をあたえないことである。たとえ、神学大系であれ、弁証法であれ、マルクス主義であれ、体系なるものを、その動的なプロセスを忘却して、あたかも永遠に固定的なものと考える姿勢を批判するのである。

たとえば、そうした問題意識をもった著作家にジョルジュ・バタイユがいる。彼は体系化というプロセスに注目しながらも、その中心部にある空虚を明らかにしようとする。あらゆる要素をシステムの中に埋め込もうとするとき、その充実化作業の中央部に定かならぬ部分が存在するこ

とに拘るのである。彼は整序化の作業をパロディー的に続行しながら、その中心地帯に、最も充実しているとされる部分に全く相容れがたい要素をいわば暴力的に挿入することで、核心部の脆弱性を、体系を永続化しようとする意図の空しさをあらわにしようとする。

> 人間自身は、最も驚くべき禁止命令にさらされている。たえず自分自身を怖れている。自分自身のエロティックな運動によって脅かされているのである。聖女は怖ろしげに遊蕩児から顔をそむける。彼女は遊蕩児の恥ずべき情念と、彼女自身の情念とが同一のものであることを知らないのである。
>
> ともあれ、その可能性が聖女から遊蕩児にまで広がっている、人間精神の全体を統一するものを求めることはできよう[12]。

ここでは、聖女と遊蕩児が同じ枠でくくられ、そこから体系なるものを考えようとする姿勢が明らかである。安定した連続的なビジョンを志向する神学にたいする批判がある。体系にたいする批判は、たとえばヘーゲルの弁証法的な構築にも及んでいるし、デリダも明快な形で分析している[13]。連続した、均質的な時空システムに亀裂を入れることが目指されている。事象にひとたび名を与えることで満足して全体なるものへと移行するのではなく、その対象に新たな名を与え続けようとしていくとき、体系への批判が生まれる。

起源を実体化しないというのも、固定した考えが、原初の運動を見落とすからである。起源は生成されるものであり、それを不動のものと考える時、「体系化」の罠に陥ることになる。起源はすべての基準となる単なるゼロではなく、ゼロを生み出す運動とともに生み出されてくるものとして、「ゼロ記号」として考察されねばならない。この記号はけっして無償の存在ではなく、それを生み出した過程を身に刻印している。記号におけるこうした歪みにたいしてラカンは意識的であり、言語学的枠組みにも修正を施している[14]。連続的な均質的な言語文化空間というのは、原初のそうした運動の忘却行為の結果に他ならない。そうした原初の亀裂、運動を記述しなければならないし、原初の活動が空虚として位置づけられていく軌跡を追求していかなければならない。その追求こそ、デリダが目指してきたことであった[15]。

### 3-3. 力を巡って

言語文化空間の生成のドラマを追うということを考える時、その場の発生の現場に働く様々な力が織りなす交錯が主題となる。力はいかに働くのか、そしていかなる作用を及ぼしていくのか。ここにある種の力学が、権力の問題が生じていくことになる。

すでにバタイユはこうした権力の問題を様々な角度から問題にしていた。そこから彼の独特のニーチェ論が生まれていくわけであるが[16]、その問題意識は継続され、1972年に「ニーチェは、今日？」という討論会に結実することになる。これはきわめてフランス的なニーチェ読解とも言える。権力と永劫回帰をどのように読み取っていくかということが大きなテーマとなっている。ある意味で、世界を連続という妄想からいかに解き放つかという問題とも言える。参加者の一人であるドゥルーズは以下のように語っている。

（・・・）自分が書いていること、そして自分が考えていることの水準において、ニーチェは脱コード化の試みを追求していたのですが、それは旧来の、または現在ないしは未来のコードの解読をもっぱらとするような相対的な脱コード化の意味ではなく、ひとつの絶対的な脱コード化－コード化できないような何かを通過させること、あらゆるコードをもつれさせるということなのです[17]。

円滑に進んでいくかにみえるコード化のプロセスをずらし、その過程を意識に上らせ、問題にしていこうとする姿勢がここにある。そしてこうした言語文化環境の成立にはたらく様々な条件の考察はポスト構造主義者とされる人々の間に共通してみられるように思える。たとえば、文学言語成立の過程を問いながら、クリステヴァはテキスト生成の場としてジェノ・テクストを考え、ラカンの影響の下に、様々な要素が力動的に飛び交うル・セミオティックという領域を想定するようになる[18]。またフーコーは、ミクロな力線が複雑に絡み合いながら、相互の影響関係のもとに、形成されていく場のあり方に注目する。そして、体系のような位階的に見える構造物が、見せかけとは異なって決して天下り的に形成されるのではないことを明らかにする[19]。

こうした権力の運動に特徴的なことは、その最初の動きを記述しようとするときに空白の存在が要請されることである。バタイユならば、そこに「死」か「不可能なるもの」といった言葉をあたえるであろう[20]。いわば、「ゼロ記号」の問題である。これは記号であると同時に記号の成立の問題という次元の異なるもの重ね合わされた要素である。力のもとには、言語化しがたい空虚が存在している。

（・・・）すべての構造はこの本源的な第三のもの－しかしまた、これも自己自身の起源を欠いている－によって動かされる。対象xは、すべての構造中に差異を分配し、自己の移動とともに差異の関係を変化させて、差異自身を差異化するものを構成するのである。
ゲームは空白の仕切を必要とする。それがなければ、なにも起こらないだろう。（・・・）このようなゼロ座標なしには、構造主義はありえない[21]。

こうした能動的な空隙をいかに記述するかが問われることになる。この場こそ逆説的ながら、ブラックホールのように、無限へと道を開くことになる。連続的均質的な時空の方には回収できないものである。この無限と向き合いながら、それをいかに記述していくかが問われることになる。それこそが近代以降成立してくる言語文化空間に突きつけられる問いかけであろう。

## 4. もうひとつの無限論

これまで横川氏が大きな展望のなかで、ロマン主義の問題を考えてきたことを示した。近代言語文化空間の成立というパラダイムの中で、この運動が果たした役割を明らかにしてきた。19世紀以降加速度的に進行していく均質化の流れの中で、そうした一義的な連続性にたいする批判として機能をロマン派のうちに、横川氏は見いだそうとしたように思える。連続を断ち切るこの瞬間の数々は、その特権性ゆえに、そこにある種の無限を出現させたような印象を与える。

こうした無限と連続の絡み合いが、近代以降の言語文化空間の複雑さを構成している。実はこの両者は相補的な関係にあり、すでに近代の始め頃から共存状態が続いていたように思える。実際19世紀以降における時間と空間の文化を論じたスティーヴン・カーンも均質的な時間の浸透と

同時にそうした普遍的とも、不可逆的とも言える時間の流れを批判するかのような時の探求が、文学はもとより自然科学の分野でも追求されていったことを指摘している[22]。

確かに古典的な均質空間体系を樹立したと思われるニュートンにおいてさえ、そこにはある種の無限的な要素が出現していた。微積分法に準拠しながら、彼は無限との関係を、とくに極限のあり方の特殊性に気づいていた。極限ではふつうの算術のような方式は通用しないのであり、また無限を漠然とした存在としてとらえることはもはや許されなくなっていた。そして積分と巾級数とを結びつける中で、無限に至る道をたどり始めることとなった。さらに18世紀においてオイラーは無限解析の試みの中で、巾級数展開を推し進めながら、ついに次元の異なる虚数を導入し、有名なオイラーの公式を生み出すに至るのである[23]。

そして無限が問題となっていく中で、これまで漠然と考えていた連続という主題、あるいは収束という主題が19世紀において数学の世界において、より厳密な形で定義されるようになっていった。さらに関数がフーリエ級数により表しうるという発見は、あらたな段階に研究を押し上げていくことになった。こうして積分はより自由な形で展開されることが可能となり、無限への世界の道がさらに深まることとなった[24]。

ただそうした方向と同時に、無限は集合論の影響において、より論理的、抽象的に考察されるようになっていった。そして無限を階層化して処理する方向も生まれ、無限の濃度が考えられることとなった。もはやただ無限と言うだけですませるわけにはいかない。無限の世界がもつ、不思議な信じがたい側面も明らかとなった。そしてそうした抽象的思考の進展は、次元、空間のアプローチにも新たな世界を開いていった。空間は今やユークリッド的な距離空間だけではなく、位相空間までも射程に入ることになり、目で見て手で触れる世界だけが対象となるのではないのである[25]。

このように連続と無限の関係は、近代言語文化空間の生成進展において大きな役割を果たしてきたし、これからもその影響が減じることはないであろう。ただ最近においては、この両者の絡み合いの中に、新たな要素が介入してきているように思える。それはコンピューターをはじめとするデジタルな領域の拡大である。それこそ、複製時代以来のビジョンを飛躍的に増大させながら、及ぼす影響は日ごとに強くなっているように思える。この領野からの挑戦を踏まえて、現代の複雑化していく言語文化空間の状況を記述していくことが、横川氏のすぐれた業績を前にしての我々に課せられた課題として存在している。

## 注

1) 小谷耕二、「横川雄二氏を悼む」、『英語英文学論叢』、第55集、i-ivページ、2005年。
2) 横川雄二、「The Prelude －記憶の風景と遠近法」吉野昌昭編、『ワーズワースと『序曲』』(以下『記憶』と略称)、南雲堂、1994年、17－18ページ。
3)『記憶』、7ページ参照。
4) カントのおこなうこの総合的な試みについて、フーコーは「人間」という概念を用いて、的確にまとめている。ミシェル・フーコー、『言葉と物』、新潮社、1974年、267－268ページ、347－349ページ参照。
5)『記憶』、28ページ。
6)『記憶』、15ページ。
7)『記憶』、21ページ。
8) 横川雄二、「水面をみつめるワーズワース －不在と現前の物語」本田錦一郎編、『近代英文学への招待－形而上派からモダニズムへ』(以下『不在』と略称)、北星堂、1998年、79－80ページ。
9)『不在』87ページ。またこのように回想を未来にむけた行為として解釈して、プルースト解釈に新境地を開いたドゥルーズの以下の功績を思い起こすべきであるかもしれない。ジル・ドゥルーズ、『プルーストとシーニュ』、法政大学出版局、1974年。
10) モーリス・ブランショ、『文学空間』、現代思潮社、1962年。
11) フーコー前掲書、145ページ。
12) ジョルジュ・バタイユ、『エロティシズム』、二見書房、1973年、4ページ。
13) 清水徹、出口裕弘編、『バタイユの世界』、青土社、1978年、15－76ページ。
14) Jacques Lacan, *Ecrits*, Seuil, 1966,pp.493-528.
15) たとえば、以下参照。
ジャック・デリダ、『グラマトロジーについて』上、下、現代思潮社、1972年。
16) たとえば、以下参照。
ジョルジュ・バタイユ、『内的体験』、現代思潮社、1970年。
17)『ニーチェは、今日？』、ちくま学芸文庫、2002年、171ページ。なお、この討論会の参加者であり、バタイユの立場に一番近いと思われるクロソウスキーについては、以下参照。
ピエール・クロソウスキー、『ニーチェと悪循環』、ちくま学芸文庫、2004年。
18) クリステヴァについては、下記参照。
ジュリア・クリステヴァ、『記号の解体学、セメイオチケ』1、せりか書房、1983年。
ジュリア・クリステヴァ、『恐怖の権力』法政大学出版局、1984年。
枝川昌雄、『クリステヴァ』(現代思想文庫)、洋泉社、1987年。
19) 特にこの傾向は以下の著作以降顕著なものとなる。
ミシェル・フーコー、『監獄の誕生』、新潮社、1977年。
20) 始源の言葉にし難い空所から力が湧き上がってくるというバタイユ的な問題意識から、現代における権力問題にアプローチしているものとしては、たとえば、以下参照。
ジャン・ボードリヤール、『象徴交換と死』、ちくま学芸文庫、1992年。

ジョルジュ・アガンベン、『ホモ・サケルー主権権力と剥き出しの生』、以文社、2003年。

21) ジル・ドゥルーズ、「構造主義はなぜそう呼ばれるのか」、『二十世紀の哲学』、白水社、1998年、358－359ページ。

22) スティーヴン・カーン、『時間の文化史』、上、下　法政大学出版局、1993年。

23) こうした動きについては、下記参照。
足立恒雄、『無限のパラドクス』、ブルーバックス、講談社、2000年（特に168ページ以降）。
志賀浩二、『無限のなかの数学』、岩波新書、1995年（特に114ページ以降）。
またオイラーについては、以下の文献の説明が詳しい。
高瀬正仁、『dxとdyの解析学　オイラーに学ぶ』、日本評論社、2000年。

24) こうした動きについては、注23の文献に加えて、下記参照。
志賀浩二、『解析入門30講』、朝倉書店、1988年。
志賀浩二、『複素数30講』、朝倉書店、1989年。
志賀浩二、『ルベーグ積分30講』、朝倉書店、1990年。

25) こうした動きについては、注23の文献に加えて、下記参照。
志賀浩二、『位相への30講』、朝倉書店、1988年。
志賀浩二、『集合への30講』、朝倉書店、1988年。
上野、砂田他、『現代数学の流れ1』、岩波書店、2004年。
K.C.コール、『無の科学』、白揚社、2002年。
アミール・D・アクゼル、『相対論がもたらした時空の奇妙な幾何学』、早川書房、2002年。

# L'infini et le continu dans l'espace culturel moderne - À la mémoire de Monsieur Yuji YOKOGAWA

Yasuyoshi AO

Depuis le 19e siècle, le developpement du capitalisme s'est fondé sur une vaste d'uniformisation de valeurs dans toutes les sciences naturelles et humaines. Analysant les techniques des poètes romantiques, M. Yokogawa vise à critiquer ces perspectives utilitaires et restrictives qui ont permis les progrès matérialistes et industriels. Il met l'accent sur la fonction des moments privilégiés que soulignent les auteurs romantiques. Ces moments éclairent le processues heureux dans lequel les écrivains se confondent avec la nature, ce qui va à l'encontre de la vie ordinaire et profane dont l'objet consiste principalement à satisfaire les besoins quotidiens.

Autrement dit, les études de M. Yokogawa portent sur la production de l'espace culturel moderne, qui est composé de deux éléments différents : le continu et l'infini. Les analyses des poètes nous montrent bien l'existence de l'infini qui permet de se libérer des contraintes ordinaires imposées par les principes calculables et quantitatifs. Le développement des industries et des techniques scientifiques risquent de faire oublier un fait aussi important que le monde n'est pas simplement composé de parties matérielles mais aussi par d'objets qui visent à critiquer ces dominances utilitaires.

Dans ces conditions, M. Yokogawa essaie de situer dans des contextes plus globaux les activités du Romantisme. Celles-ci appartiennent aux tendances critiques qui se sont poursuivies à partir du 19e siècle soulignant les activités dynamiques et artistiques qui s'opposent à la domination des perspectives matérialistes. Maintenant ces critiques sont d'autant plus importantes et urgentes que le développement des domaines numériques qui nous semblent incarner le mieux les visions calculables, exercent une influence de plus en plus grande sur tous les domaines de la culture contemporaine.